

(能)

# 敦

## 盛

ワキ 平木 豊男

間 炭 光太郎

大鼓 田中 一義  
小鼓 多田 順子

笛 室石 和夫

ツレ 水口 純治  
ツレ 谷 清士  
ツレ 酒井 章  
シテ 渡邊 茂人

後見 渡邊 荀之助  
木谷 哲也

地謡 寺田 茂 佐野 弘宜  
船本 嘉人 広島 克栄  
長野 裕 藪 克徳  
中村 清 田屋 邦夫

休憩 二十分

# 山姥

キリ

松田 若子

地謡 佐野 弘宜  
藪 俊彦  
高橋 憲正  
山崎 健

(仕舞)

# 呂

## 蓮

僧 山田 讓二

宿屋 炭 哲男  
女 若生 敏郎

(狂言)

後見 能村 祐丞

(能)

# 女郎花

ワキ 北島 公之

間 能村 祐丞

大鼓 飯嶋 六之丞  
小鼓 住駒 俊介  
太鼓 麦谷 暁夫  
笛 江野 泉

ツレ 佐野 玄宜  
シテ 島村 明宏

後見 藪 俊彦  
福岡 聡子

地謡 米島 和秋 高橋 憲正  
山本 貢伸 佐野 由於  
笠間 啓 高橋 右任  
木谷 哲也 松本 博

## 能 敦 盛 (あつもり)

出家して今は蓮生を名乗る熊谷次郎直実(ワキ)は、かつて手に掛けた平敦盛の菩提を弔うため都を出て一ノ谷の古戦場に向かいます。須磨の山手に笛の音が聞こえ、憂き世をかこつ草刈り男たちに出会います。なかに風雅を解する若者(前シテ)が交じり、その青葉の笛の持ち主は一人居残って十念を授かることを願ひ、蓮生の日ごろの供養に感謝して消え失せます(中入)。その夜法事を営む蓮生の前に敦盛(後シテ)が現れ、法の友を相手に懺悔の物語りをします。驕れる平家はひと昔の夢、寿永の秋には西海に流離し須磨人となり果てた一門にあって、思い返せば如月六日、父経盛の陣での歌舞の遊びよと舞いなぞるうち、翌日の最期が記憶に蘇って敦盛は思わず太刀を手に蓮生に迫りますが、やがて我に返り同じ蓮の成仏を願って合掌します。世阿弥はこの音楽好きの美少年に平家の罪を一身に背負う潔癖な感受性とそれゆえか友情から疎外された孤独な魂を与えました。

## 狂言 呂 蓮 (ろれん)

諸国修行の僧が宿主の問いに答えて、出家の境涯や地獄極楽の有様を教化しますと、宿主がにわかには発心したので、出家の形に調べてやります。そこまではりっぱな先達ぶりでしたが、法名をつける段にはたと困り、蓮の字にいるは冠して、いかにも安直な呂蓮坊が気に入られるあたりは、修行のほどを疑わせます。案の定、食事の世話に出た女房のけんまくに、宿主の道心など吹き飛ばされ、無理強いを咄められた僧は打ち倒されます。

## 能 女郎花 (おみなめし)

九州松浦方から上京する僧(ワキ)が津の国山崎に着き、男山石清水八幡宮を仰ぐ野原に繚乱と咲く女郎花を眺めて、一本手折ろうとします。そこへ花守の老人(前シテ)が声を掛け、両者による「折るな」「許せ」の押し問答は譲らず古歌を引き合いますが、僧の歌心を認めた老人は、僧に同道して山上の霊地へ案内します。参拝を果たし、日も暮れた頃、僧に問われて老人は麓の男塚女塚を見せ、小野頼風夫婦への弔いを頼んで木隠れます(中入)。やがて亡魂を供養する僧の前に、頼風夫婦が若き日の姿(後シテ・ツレ)で現れ、塚のいわれを明かします。女は都の人であり、訪れの少し間遠な男を恨み、男の住む男山放生川に身を投げました。死骸を埋めた塚には女郎花が生え替わり、男を恨む身のくねりを見せます。罪を自覚した男もあとを追って今は共に邪淫の悪鬼と化し、我と我が身を責める苦患を救われたくて僧にすがるのでした。古今集序注の説話に基づきます。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十一年十一月三日(日)午後一時始

(能) 松 風 (狂言) 文相撲 (能) 卷 絹